

強い思い 道開く

「夫は仕事、妻は家庭」「女性に学問は要らない」…。そんな価値観がまかり通った時代に「わが道」を切り開き、周りをも動かしてきた人たちがいる。精神科医の大澤多美子さん(76)＝広島市南区＝も、その一人だ。大学在学中に2児を出産。今なお一線で患者と向き合う。期せずして娘もなぞるような道を歩んでいる。そんな大澤さんの足跡から見えてくるものとは一。(田中美千子)

国際女性デー
2026.3.8



①勤務先の病院で「本当に多くの人に支えられてきた」と語る大澤さん (撮影・宮原滋)
②長女を膝に抱く医学生時代の大澤さん

長年、発達障害のある人たちに寄り添ってきた。市こども療育センター(東区)で定年まで勤め上げ、今は西区の病院に勤務。原爆資料館(中区)の展覧を検討する有識者会議など、行政の委員も担う。休日は講演会や展示会を巡り、読書にもしむ。

「知らないことを知るのが好き。だから医師になれて幸せです」。からりと笑い、こうも続けた。「確かに逆風にも遭ったけれど多くの先輩者がいたし、いつも誰かが味方してくれた。おかげで今の私があるんです」

「知らないことを知るのが好き。だから医師になれて幸せです」。からりと笑い、こうも続けた。「確かに逆風にも遭ったけれど多くの先輩者がいたし、いつも誰かが味方してくれた。おかげで今の私があるんです」

精神科医の大澤さん 大学生で出産 今なお一線



ひと言。休学するほかなかったです。娘を出産し、復学すると、雰囲気は一変していた。医学部初の女性教授が誕生したことが大きかったらしい。彼女にも子どもがいた。時折、娘を連れて行くと、誰もかわいがってくれた。6年生の秋、今度は長男を出産。担当教授の「休んだ分は冬休みに補おう」という言葉がありがたかった。後れを取りたくなくて、産後1週間で教室へ戻った。どうしても医師にならなかつた。その熱が伝わるのか。思えば、多くの人が支えてくれた。全面的に育児を助けてくれた母、毎日のようにおかずを届けてくれた「近所さん」。そして寛容だった夫。夫にも、脱サラして弁護士になるという夢があった。大澤さんは卒業後、夢を応援する側に回り、家計を支えた。

2年後、神戸大医学部へ。新人生120人のうち女性は12人と少なく、入学後ほどなく結婚した大澤さんの存在はおのずと目立った。続けて妊娠が分かると、一部の教授が「けしからん、進学させん」と豪語したと聞いた。3年生になり、出産のために1週間の休みを願い出た時、ある教授が「単位はやらんぞ」と

母の背中 導かれ



長女で医師の三村さん「自由を大事に」

大澤さんの長女で小児科医の三村由卯さん(50)＝滋賀県野洲市＝は「確かにわが家は一般的な家庭じゃなかった」と振り返る。

母は弁当を作り、学校行事にも顔を出してくれたけれど、学校から帰っても当然いなかった。祖母がいたから寂しさも不便も感じた覚えがない一方、当時の私は将来の夢を「普通のお母さん」と書き残している。思うところがあつたんですよ。

大事にしてくれたこと。勉強しろとも、ピアノを練習しろとも言わなかった。学生時代にバイトをしようとした時にも「費用は出すから今は好きなことをしなさい。どうせ一生、働くことになるんだから」と。3人の娘の母となった今、過干渉気味の私にはまねできません。

「母がすごいと思うのは、私の『自由』を何より

母がすごいと思うのは、私の「自由」を何より大事にしてくれたこと。勉強しろとも、ピアノを練習しろとも言わなかった。学生時代にバイトをしようとした時にも「費用は出すから今は好きなことをしなさい。どうせ一生、働くことになるんだから」と。3人の娘の母となった今、過干渉気味の私にはまねできません。